



仙詠古實錄

舊門隨門記

仙詠古實錄

天保九年

仙詠古實錄

5
6650

竹抄古寶録

京極殿連致御會之度



九條殿祿園ニ京極殿連致御會之度

近衛殿下範山公法皇世を成彩王家の宗道宗義法隆

紹巴法眼御用出高旨法中山河京極法師相承承種回

貞法世外公御法皇世を成彩王家の宗道宗義法隆

義之まで山影公誘ひ来る所の兼徳小峯交る八重山吹の枝

器致し折れし湯泉水の杜を法皇世を成彩王家の宗道宗義法隆

富徳を下れ河井杜を一本折て汝の部の御所の養生を授入

よと任河原の水に富徳界尾をまきさるり生れ付柳屋法外なる京

池小光園と足えを半ありし湯池の源を返りしと河や

思古て富徳池まきさるりなと湯まきさるり小峯として杜を

二三本神小峯ありしを近衛殿湯泉とて

京極殿連致御會之度

連致一口小峯ありしを近衛殿湯泉とて

<002-39>

怪すゝの根を伝へて

のまんとまきと二反の位

ま有才にて伝へて其禮

知らり山影を影を影と

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

欠禮中より中より

吟苑中より更に雜子の名ありたる吟声を出してさる飛まつる小鳥
よりの振羽あつて思ふのほ緒悽多しきと記の初心をまきとん
爲記の若く余情の味凡世の及ぶ何んらん

妙法寺聖の會之事

其旨も宗湯も欠徳も是と十句亦白のこら獲杯して他世
をそ守りたる唐席もなほそらるるに後 亦六十一日の束つて
系を甲州妙法寺に他世のそらるるに後をけるるに連ふそら
の妙法寺も所連いたる所も人尤方神をかり花瓶を之と書巻と
攝（妙法）の唐席を始にそらつた交り舞面八白を記し

持珠やぬる袖なるの唐のちる 欠徳

かり神めされよそりのまらるるに 西云

天人やきこるとあるに 欠徳

備わりの唐も、唐の思ふに 欠徳

何國ともあるに 欠徳

日出て 欠徳

半たあるに 欠徳

御針さあつて 欠徳

西云、三条院西梅忠の町小住と弥高齋せりて、取持珠の書
と持珠せりて、とん、欠徳家の集十首の程ありて、介
書珠とて、ほされたり、け人欠徳の法門の御傳、僧の書と
あるに、とあるに、妙法寺を西云、唐をそらるるに、由法

柳園草の九龍月の唐の書

竹掃蓮の妙法院法門跡の内境内に杉山欠徳小文及を同せりて、
内巻悽深く、まけまけ地と欠徳ねね、て苦の九龍を作り吟苑
篇とりて、翻思あるに、小堂と建て、は、筆種千部を、あめ一生
和方の唐、他世、百白、おと、まきり、十時、系、唐、え、年、八月、山、本、西、云、と
安原、三、章、と、あ、人、お、秋、魚、の、ま、つ、る、答、宴、の、唐、に

天長く一人を、秋の月

ふり、世、芸、苑、の、名、あり、り、人、を、秋

旭、わ、り、に、お、も、あ、り、子、を、あ、り、て

欠徳 三章 西云

云々序にほゆる重し 正統冠弁に仕了則京研六条及坊令全相
少村李必末名道首他田正武中嶋久義少京正在鳥本三伯山田
佳禮等といひ介略し

面八句之事

若白の陽之天地開始一陽發矣したる之然るふありいりふと古きくま
せりやうふと事と汗心と事と一然又陰二陽の所陽陽小龍りて
多氣小陰字と事と事と一陰一陽小正の物ありぬい各白小正を事天地
初有と事と一カに天地究之人の及又始之能事各白初子目を加げ
まして各白と事と事と事と一各他人の之を説く四句目八句目を傳へ
まして四句目を加げの東八句目を表の東もふより初心の入東座の人事と事と
面八句の針をかゝれ素表あるに陰陽の心は折に言葉と加るとるる
の上各事と陽の下各事とに陰と事と事と

各白小切字の事子細の事

又次に五七五七の白小と陰陽初有と事と各白の事と各白の事と陰陽
初有と事と各白小切字の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と

陽白の事

先字素りの白を始ふと事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と
各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と
各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と

各白の事

又後白の事と一義の二一紙の字と事と事と事と事と事と事と事と事と
各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と
各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と
各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と
各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と
各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と

五音連聲各句の事

各白の事

右に東陽小初名各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と
各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と
各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と
各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と各白の事と

羅一ノ日とて風かしのくち
無節くさきとほほむらさ

是こよちう人好か合はる

思きつるも宛ねてらんよ

青天子あめ月か物ほりさ

あまのつらふ句集ちる言を好と称并しむらさ
の身とてふらふかた

一日とてあねの茶をきき

御多様回つらむつらむの句作らる

ほつてさきさきさきさきさき

とつらむらほしとつらむらほし
たのしみ

東もやまもさうめつらむらほし
さうめつらむらほし

是をきき向の人と射して一旬とて三回とて降はるたの

一熱して百人の言別れも風京も悟りも今又あるしては

かかんらんはつらむらほしめそ百人の中さきさきさきさきさき
えまや待と他はさきさきさきさきさきさきさきさき
又他は

話とつらむらほし百人の詞とつらむらほし一段せめよ作らるつらむらほし
つらむらほし様の手さきさきさきさきさきさきさき
おくてそ人さきさきさきさきさきさきさきさき

そよよつて

そよよつて

雲巻一ノ日とて思へておれりち

又遠見人家花有る人

不説貴賤と親疎

是よつて

あまのつらむらほしを食のたふも取ら

を食と責とつらむらほし取くとつらむらほし取らむらほし
又西の上人の物より話とつらむらほし話とつらむらほし

櫛より海苔とて老の言とせ

西のつらむらほし二つらむらほしつらむらほしつらむらほしつらむらほし

らば佳海客にはきつてをのまのなり中の服をき
又心に宗々のこころは甘きと思ふにのち描のこころはさう
よめて越人の浦に——思ひきる寸描の意
ほのほののときをきかすにきけるにうけて
酒堂

東坡り詩小玉千千人枕とらるを

一人のしさを欄や松浦涼 晋子

是の西國榜上ののり

公の旅片くれ存めを思ひやると

友を彼や彼固はすしんばす 金

櫻集集第巻のつらま——アを信るる殿と小倉と九月せと
ま—— 越人のうら

日ゆくややね性、なるをきく梅

古も判してらまよまよ——月にかや木にさすり
又凡兆の宮様とのちのこころをさうとて——

公乃下系やをきかすをこころに謀ふをきかすに保るるをきかすは
おさる侍の或可きま

猶も悲れりるや明乃月を中出侍

師の目ばり奈むはれり台歌り

海にそそぎをきかすうら
海吹おくるそそぎうら

竹ををもつてつられに他世小の物に——をきかすに保るるを
知るかたふゆまを他世小暇て、記弱く来侍。

是と如くは木の海を といふに

まづきとて情を木の海を とらに他世よらると

竹ををたはす——かゝるにこれに他世の語路に保るるに保るるに
伊にひく捨るはきよ上のさひに思ひ出るともよまき——句の
魂に不入言を旅をきかすに保るるをきかすに保るるを

柝子舞向の捨るははるをきかすに保るるをきかすに保るるを
事成り上とらに保るるをきかすに保るるをきかすに保るるを

さきかへりし行きたる貝と水は海にまじりては情のゆかりまじりて
只心なきを打破してさしつゝとわらふもまた張りつるやんか
のたまきねよんねし

小言さしつゝはねのぬねのゆめを

一鳥不鳴山更幽といつるをわらふ思ふ

古今人跡四時遷変風景千里人情万慮一千亦存るを

思ひまじり風京を極情を作しつゝぬをそとせ出しつゝ

かゝるまそくはふちのこゝちのあうけきとも思ふ

古々ゆえ禄甲戌の及原川の字店を出て五の町に糸分と縁海

信濃は波もさるるこゝちの月

謀りかへりしと吹抜く道とさるる信濃はが口を信花はそら
外にふるぬらふる高岸の月もとさるる風機ゆるりのこ介清小糸
集りし門生もわて信濃乃向あかりし

信濃は波もさるるこゝちの月

許さるる折下を道とせりし思ひぬを舞いとあかりし

ちりまの神はゆるし信子感後を流しつゝあはれ川までく

あまの地獄とめはゆるし信今思ふはあはれ川をさるる女

自のあかりし折下を道とせりし思ひぬを舞いとあかりし

戯て曰君子の珠十兩をいそぎしは河の佛の悟もいそぎし
小て信あまの面をかちのやちあまのまの甲斐又と室ひしそ
礼もあまの芭蕉乃めはり比書画を好みし住居の巻戸はしく
陰を張るるまじり珠十兩の画の中は詩へは詩中不画何ぞとい

枯乃有る鳥のほりたり林のそる

昔の事... 又... の事なり

障... 作... の事

竹... の事... 此... の事

本... の事... 此... の事

そ... の事... 此... の事

心... の事

此... の事... 此... の事

又... の事... 此... の事

此... の事... 此... の事

此... の事... 此... の事

此... の事... 此... の事

此... の事

此... の事

此... の事

此... の事... 此... の事

此... の事... 此... の事

此... の事... 此... の事

此... の事... 此... の事

此... の事... 此... の事

此... の事... 此... の事

此... の事

此... の事

此... の事

此... の事

此... の事... 此... の事



小枝考

附方分自他傳

他見すも不の換千金

現ふ白い心慮あけけし 自

梨の花や咲けむらうつらう

雛子より驚く如くむき 他

かたし中の人情も甘き自他を振るて句作さし

やうし中しそ中のをと西ふてつらう

あつりかたしの後やめしん 他

変風をくみり 行末 他

そと自他とふりては 他面の句流は四五句の人情たき句

付くは時を今一向の正して 附句の常の事

花の瓦をくみり 花の結さして 他

花の瓦をくみり 花の結さして 他

花の瓦をくみり 花の結さして 他

花の瓦をくみり 花の結さして 他

又 首の節の踏ふきふり 小言のり 他

かたし人情もなる 自の句附るは 他人の自の句附るは

かたし人をとて 自の句より 思ふを 思ふを 思ふを

うせらう 白化の厚 他 附るは 他

並本は 花の家の 他

入るは 雛子抱る 物菊い 他

入るは 雛子抱る 物菊い 他

かたし他の句は 他に向て 附るは 他人の自の句附るは

かたし他の句は 他に向て 附るは 他人の自の句附るは

かたし他の句は 他に向て 附るは 他人の自の句附るは

かたし他の句は 他に向て 附るは 他人の自の句附るは

かたし他の句は 他に向て 附るは 他人の自の句附るは

かたし他の句は 他に向て 附るは 他人の自の句附るは

かたし他の句は 他に向て 附るは 他人の自の句附るは

かたし他の句は 他に向て 附るは 他人の自の句附るは

し

何んか... 縁の... 目

いのち... 目

の... 目... 物... 目

一言... 目... 他

又... 目... 他

の... 目... 他

い... 目... 他

あ... 目... 他

あ... 目... 他

あ... 目... 他

あ... 目... 他

あ... 目... 他

あ... 目... 他

あ... 目... 他

あ... 目... 他

あ... 目... 他

あ

形の如し中のうと公事入とて出でて其の白と海をわたりて

年事あまの後の縁人望りて

こてもとて同よあ・平・三・宮・中亭

水と多て誠悔くともあまの

う移す月の白も付かなくさうそと暮さると出ると其のこよる
他の白も階るとんた

身もまを女のこまの女

台前も存すもあまの宮原き自

あまもておれいよあま

か移す身とらと船のうとつきてあまの海しる時大陸人もあまを
階く——さるくるところの船の舟もはりてあま移す他とて
せぬらうし

編みまあけと又目のこらあま自

あまの——まのこらあま自

標しるあまて内保身えの機他

う移す身とあまそこよ者ぬ人たがいやそり自のうま——して他
のうとあまて階——

女も女外階たあ——何る人懐きて付込むあま

ふのの身方より作あぬけ之の糸白と人情の流す

あまの何——いの時節あまあまあまての右付

付込むを知てあまによ——階くあまを途向き

未練あまのこもあまのこ

右三年あまを以て煮あまのんせりあの一法あま
後初年他見を教えたあまの人あまあまあま

元禄五年春

色羽あまあまあま

吉来全あまあま



